

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

複合動詞の非用：

『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』に基づいて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2026-01-23 キーワード: 複合動詞, 使用実態, 非用, 中国人学習者, 日本語教育 作成者: 丁, 若峰 メールアドレス: 所属: 総合研究大学院大学 博士後期課程
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/0002000593">https://doi.org/10.15084/0002000593</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



## 複合動詞の非用

——『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』に基づいて——

丁 若峰

総合研究大学院大学 博士後期課程 / 国立国語研究所 共同研究員

### 要旨

使用頻度の高い複合動詞（「V1」連用形＋「V2」）は、日本語を第二言語とする学習者には学習困難であることが指摘されている。その実態を明らかにするために、本稿では、複合動詞の習得研究においてしばしば見落とされがちな非用（ある表現を学習者が使えない、あるいは使わない現象）に注目する。『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』（I-JAS）を用いて、2つの場面における2語の複合動詞の使用実態を分析した結果、会話でも作文でも、中国語を母語とする日本語学習者は全体として対象語複合動詞使用の頻度が日本語母語話者より少なく、代替表現として単純動詞を使う傾向があることが明らかになった\*。

**キーワード**：複合動詞、使用実態、非用、中国人学習者、日本語教育

### 1. はじめに

複合動詞<sup>1</sup>は日本語母語話者（以下、「母語話者」という）に幅広く使用され、単純動詞では表し得ないさまざまな表現を作り出す役割があると指摘されている（森田 1994, 姫野 2018）。

これまで、複合動詞に関する学習者の誤用を考察した研究が多くされてきたのに対し、学習者の非用に注目する研究は少なく、中国語を母語とする日本語学習者（以下、「CLJ」）の複合動詞の非用実態や非用が生じる要因はまだまだほとんど明らかにされていない。本稿でいう非用とは、ある場面で母語話者なら当然使うだろうと思われる表現を、学習者が使えない、あるいは使わない現象である（水谷 1984, 丁 2024a）。陳（2008: 69）は、「誤用分析の限界を克服するために、これからの複合動詞習得研究では、誤用だけではなく、正用も非用も含めて学習者の言語体系を探るという中間言語研究が必要となる。」と述べている。また、学習者には、より適切な言い方をしたい、いろいろな述べ方をしたいといったニーズが存在すると考えられるが、そのためには、CLJは母語話者と比べてどのような複合動詞が使えていないかという、非用の実態を明らかにする必要がある。

\*本研究は、一橋大学大学院言語社会研究科に提出した修士論文の一部に加筆・修正を加えたものである。本研究の一部は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」（プロジェクトリーダー：小木曾智信）のサブプロジェクト「学習者辞書用語彙資源の構築」（プロジェクトリーダー：柏野和佳子）の研究成果である。なお本稿は、2024年8月28日「言語資源ワークショップ2024」の予稿に掲載した「使用実態から見た複合動詞の「非用」——『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』に基づく分析——」（丁 2024b）をもとに加筆修正したものである。

<sup>1</sup>本文でいう複合動詞とは、「立ち上がる」「取り上げる」のように、前の動詞（「前項動詞」或いは「V1」）の連用形にもう1つの動詞（「後項動詞」或いは「V2」）が結合したものを指す。

そこで、本研究では、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS)の調査によって、CLJによる2つの場面における「飛び出す」と「呼び止める」の非用の実態を解明する。

## 2. 先行研究と本研究の位置づけ

これまでの中間言語や使用実態の研究において、非用という現象は頻繁に言及されている。水谷(1984)が対照言語学的立場から「非用」という術語を提唱し、その後も一連の研究(水谷1985, 1993)を通じてこの概念の検討を行っている。また、海外では、Hulstijn & Marchena (1989)が英語を第二言語とするオランダ人学習者が句動詞を意味的な理由から回避する傾向にあることを明らかにしている。

日本語教育学研究において、近年、授受表現の非用に関する研究が増加している。張(2017)は、JFL (Japanese as a Foreign Language) と JSL (Japanese as a Second Language) という異なる学習環境が「てくれる」の非用に与える影響を調査し、学習環境によって口頭表現に差があることを示した。王(2000)は、中国語母語話者の非用の原因を「母語の干渉」と「教育上の問題」に分類した。

一方、複合動詞の非用の実態に注目する研究はまだ少ないが、いくつかの研究は見られる。例えば、マリヤナ(2017)はコーパス調査を行い、「学習者は母語話者よりも複合動詞の使用頻度が低い」という仮説が正しいことを検証した。また、志賀(2017: 88)は「日本語母語話者に比べ、中国人学習者は複合動詞の使用ができておらず、学習者のレベルと複合動詞の習得状況は比例する」と指摘している。さらに、高(2018)は「複合動詞の不使用」を重要な誤用パターンとして扱い、学習者が単純動詞を複合動詞の代わりに使用する現象を考察した。その「不使用」の原因は、「学習者が単純動詞のみの使用で意味が通じてしまう、或いは意味が適切に表現できると認識している」ことだと指摘している。

複合動詞は母語話者に幅広く使用されており、多様な意味やニュアンスを表現できるため、学習者の理解力や発信力を高めるうえで、重要な語種であると考えられる。しかしながら、複合動詞の非用をテーマとして、非用の実態を体系的に考察する研究は未だ見られない。そのため、CLJの産出時における複合動詞の非用の比率や、非用の場合にどのような代替表現がよく見られるか、といった非用実態を解明する必要があると考える。本稿でいう「代替表現」とは、対象語を基準とし、同一場面において対象語が使用されなかった場合に話者が用いたその他すべての表現を指す。ここでの「代替表現」は、文法的な正誤や母語話者における使用頻度の高低といった要素には依拠せず、あくまで対象語が用いられなかったという事実に着目して分類されるものである。

そこで、本研究は、具体的な複合動詞の非用を語ごと、かつ場面ごとを単位として考察することで、その複合動詞の非用の実態を具体的に解明することを目的にする。さらに、1語1語の非用から複合動詞全体の非用を考察することが可能になり、非用の研究に新たな視点と方法を提供できる可能性を示す。以上より、本研究では、以下の研究課題(RQ)を設定する。

RQ1：同一場面において、CLJによる対象語複合動詞の非用の実態はどのようなものか。

RQ2：CLJの習熟度、学習環境および出身地は対象語複合動詞の非用に影響するか。

RQ3：CJLが対象語複合動詞を使っていない場合、どのような代替表現を用いているか。

### 3. 調査方法

#### 3.1 使用するコーパス

本研究は『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS: International Corpus of Japanese as a Second Language) (以下, I-JAS) を使用する。I-JASは、迫田久美子氏とそのチームによって開発された大規模学習者コーパスである(迫田他 2016)。このコーパスでは、12の異なる言語を母語とする日本語学習者1000名、母語話者50名、合計1050名の話し言葉及び書き言葉を横断的に調査し、データを収集している。その主な特徴として、まず、話し言葉と書き言葉の双方について、外国語を母語とする学習者との比較対象として母語話者のデータが「同じタスク・同じ量」で収集され、両者の日本語を定量的に比較することができるという点がある。また、学習者には日本語運用力のテスト(3.2で後述)を実施し、レベル判定が行われている。さらに、全参加者の詳細な背景情報のデータが含まれているため、母語別、習熟度別、タスク別、学習環境別などのデータの比較が可能になる(迫田他 2020)。

#### 3.2 分析対象者

コーパス調査では母語話者とCLJ<sup>2</sup>を分析対象とした。具体的には、母語話者(JJJ)50名と、CLJ266名、計316名の分析を行った。CLJの内訳は以下の通りである。

表1 CLJの学習環境による内訳

学習環境	話者ID	人数
海外教室	CCH, CCM, CCS, CCT	200名
日本国内教室	JJC, JJE	66名

表2 CLJの出身地による内訳

出身地	人数
中国大陸	159名
台湾	107名

また、学習者に対してはJ-CATとSPOTによるレベル判定が行われている。J-CAT (Japanese Computerized Adaptive Test) は、日本語能力を自動で判定するテストであり、「聴解」「語彙」「文法」「読解」の4セクションから日本語能力を測定するものである<sup>3</sup>。一方、SPOT (Simple Performance-Oriented Test) は、TTBJ (Tsukuba Test-Battery of Japanese) の1つで、言語知識と言語運用の両側面から日本語能力を評価するものである<sup>4</sup>。

<sup>2</sup> 本研究は量的分析に基づいているため、人数が少なかった日本国内自然習得におけるCLJは対象外とした。

<sup>3</sup> J-CATの詳細については、以下のwebサイトを参照：[https://j-cat.jalesa.org/?page\\_id=168](https://j-cat.jalesa.org/?page_id=168)

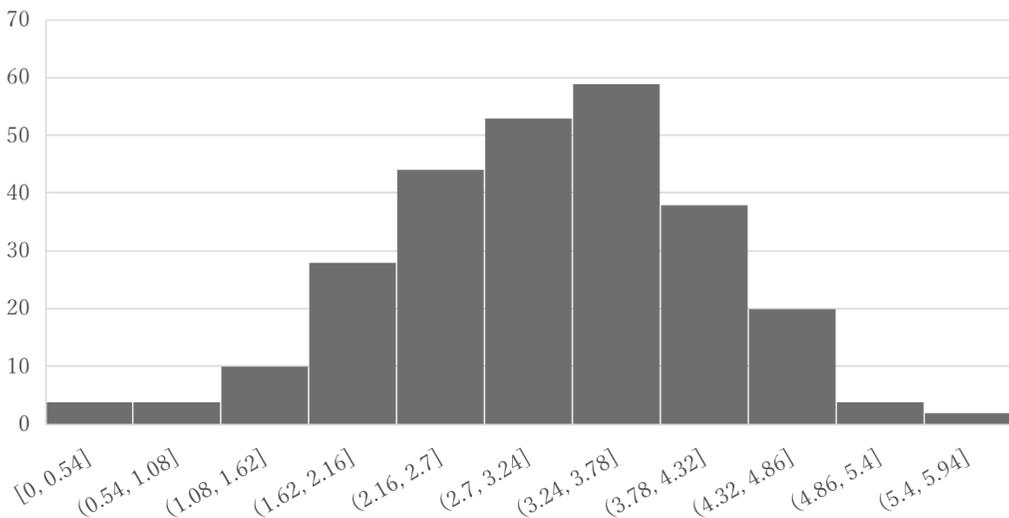
<sup>4</sup> TTBJについては<https://ttbj.cegloc.tsukuba.ac.jp/p2.html#pageLink05>に各種の先行研究が挙げられている。SPOTの詳細は小林他(1996)、小林(2005)を参照。

過去の I-JAS による研究では、J-CAT の総合スコアに基づき習熟度段階を分類したものが多かったが、各技能に共通する潜在的な習熟度因子が十分に考慮されていないと思われる。本研究では、より全面的に学習者の習熟度を把握し、妥当性の高い習熟度評価を実現するため、陳 (2023) を参考として J-CAT と SPOT の両方のスコアに基づいて、学習者の総合習熟度を計算する。具体的には、J-CAT の 4 技能別スコア (聴解・語彙・文法・読解)、J-CAT 合計スコアと SPOT のスコア、あわせて 6 種のスコアで主成分分析を行い、合成された第 1 主成分得点を総合習熟度とする。その結果、第 1 主成分は、寄与率が 72.55% である。累積寄与率の判断において絶対的な基準は存在しないが、社会科学分野においては累積寄与率が 60% 以上であれば十分に受容可能であるという見解が広く共有されている (Hair et al. 2006)。そのため、第 1 主成分は 6 種のテストのスコアをカバーする代表値であると言える。また、主成分負荷量は、SPOT が 0.755、J-CAT が合計 : 0.985、語彙 : 0.700、聴解 : 0.643、文法 : 0.661、読解 : 0.609 であった。

以上の方法により、値の区間が  $[-3.0719, 2.5548]$  の総合習熟度を得たが、分析の便宜のために、全ての総合習熟度に最小値  $-3.0719$  を加算することで、値の区間が  $[0, 5.6267]$  の総合習熟度を得た。これを有効数字 3 桁として四捨五入した結果を、以下の表 3 及び図 1 に示す。図 1 より、CLJ の総合習熟度が正規分布に近い形を示しており、頻度は中央の区間  $[3.24, 3.78]$  に集中し、両端では頻度が低くなることがよくわかる。

表 3 CLJ による総合習熟度

	人数	最大値	最小値	算術平均	標準偏差
総合習熟度	266	5.63	0	3.07	1



(階級区間の表記について、 $[a, b]$  は「 $a \leq x \leq b$ 」を、 $(b, c]$  は「 $b < x \leq c$ 」を示す。)

図 1 CLJ による総合習熟度のヒストグラム

### 3.3 分析データと場面

分析用のデータとして、I-JAS の複数のタスクのうち、4～5コマ漫画を見て物語を作って話す、または書くというストーリーテリングとストーリーライティングタスクを利用した。使用したのは「ピクニック」タスクと、「鍵」タスクの2つである。これらのタスクには図2の2種の漫画が使われている。

まず、複合動詞が使用される傾向がある1コマを単位として対象場面を決定し、名をつける。次に、調査協力者の会話文字化資料と作文から、対象場面の描写であると判断される文を探して抽出する。最後に、抽出された文から対応する述部を探し、辞書形で取り出す。特に対象場面の描写がない場合、【描写なし】として集計する。また、対象場面の描写はあるものの、述部が省略されている場合、【省略】として集計する。

「ピクニック」タスクからはコマ④の犬が飛び出してくる場面を複合動詞が非用になる可能性がある対象場面として抽出した。犬の動作の描写が避けにくい場面であり、当該場面の母語話者の産出データを概観したところ、「飛び出す」が用いられる傾向があるためである。そして、この場面のストーリーテリングを「ST1 場面」、ストーリーライティングを「SW1 場面」と名づけることにする。同様に、「鍵」タスクにおけるコマ③の警官に呼び止められる場面は、その警官

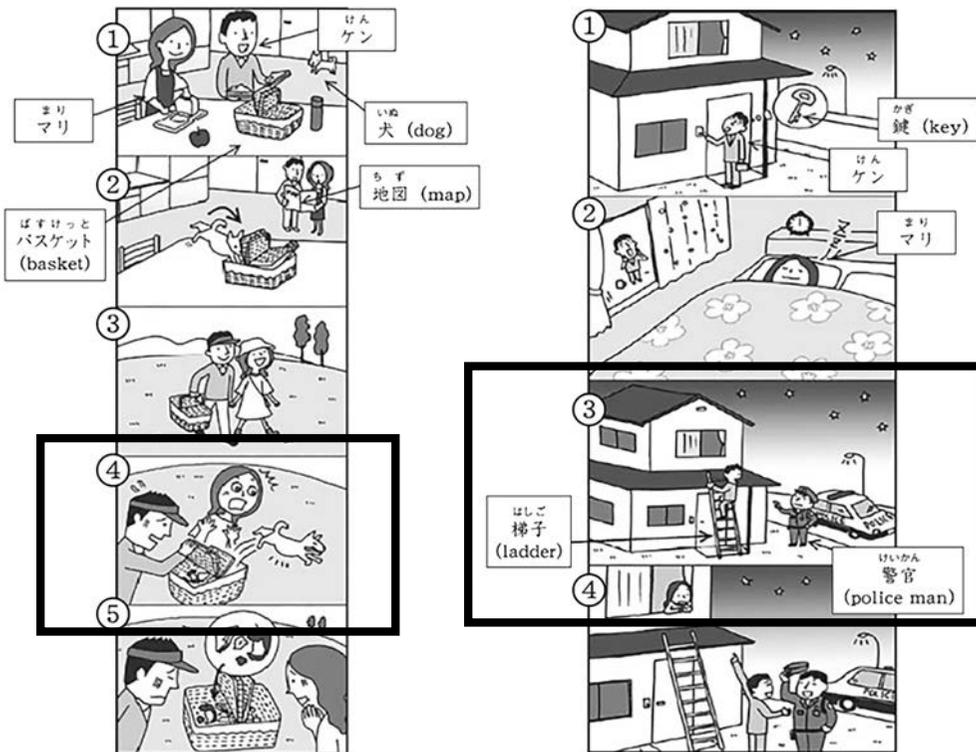


図2 「ピクニック」タスク (左) と「鍵」タスク (右)

の行為に関する描写が必要であり、母語話者ではそれに「呼び止める」が使われる傾向があるため、このコマ③を対象場面として抽出した。そして、これらを「ST2 場面」、「SW2 場面」と名づけることにする。

### 3.4 分析手順と分析方法

まず、3.3の手法で各4つの対象場面の記述からそれぞれに対応する述部を抽出し、集計する。次に、「ST1 場面」と「SW1 場面」における「飛び出す」の非用、及び「ST2 場面」と「SW2 場面」における「呼び止める」の非用の実態を分析する。

具体的な分析方法としては、はじめに、記述統計分析を使用し、対象場面における対象語及びその他の表現の使用状況について総合的に概観する。続けて、母語話者とCLJが産出した例を示すことで、同じ場面における母語話者とCLJによるその他の表現の使用実態を比較する。次に、カイ2乗検定を行いCLJの母集団による対象語の非用の傾向を分析する。つまり、独立度の検定によって母語話者とCLJの間に複合動詞の使用率に有意な差があれば、非用になっている可能性があると判断する。また、非用の程度を推測するため、クラメールの連関係数 $V$ （以下、効果量という）の大きさを基準とする。本研究で扱う基準は、水本・竹内（2008）を参考に、以下の通りとする。

- ① 効果量  $< 0.1$  → 非用になっている可能性が低い
- ②  $0.1 \leq$  効果量  $< 0.3$  → 非用になっている傾向がある
- ③  $0.3 \leq$  効果量 → 非用になっている可能性が高い

最後に、「非用の有無」を目的変数とし、総合習熟度、出身地、学習環境を説明変数とするロジスティック回帰分析（Logistic Regression Analysis）を行う。ロジスティック回帰分析は医学での疾病の発生確率やマーケティングでの購買確率の予測など、多岐にわたる分野で応用されている。この手法は、特に二値の結果を持つ従属変数の場合に最適であると考えられるため、非用の研究に適切な手法であると考えられる。

本研究では、目的変数として「非用の有無」（使用 = 1, 非使用 = 0）を設定し、説明変数として [総合習熟度], [出身地], および [学習環境] の3つを採用した。ロジスティック回帰モデルにおける目的変数と各説明変数  $x_n$  との関係は、以下の式により表される。

$$\log\left[\frac{p}{1-p}\right] = a_1 \cdot x_1 + a_2 \cdot x_2 + a_3 \cdot x_3 + b \quad (a_1, a_2, a_3, b \text{ は定数})$$

ここで：

- $x_1$  : 総合習熟度（連続値）
- $x_2$  : 出身地（台湾 = 1, 大陸 = 0）
- $x_3$  : 学習環境（日本 = 1, 海外 = 0）
- $b$  : 切片

本研究では、統計解析ソフトウェア IBM SPSS Statistics 26.0 と表計算ソフトウェア Microsoft Excel 16.80 を使用する。

#### 4. 「飛び出す」の非用の実態

##### 4.1 ST1 場面

##### 4.1.1 ST1 場面における「飛び出す」の非用

ST1 場面における描写の内訳は表 4 の通りであるが、本研究においては【描写なし】も非用として捉えているため、「飛び出す」を使った者とそれ以外の表現を使った者、つまり、対象語と非対象語に分けて集計し直した。そして、ST1 場面における CLJ の「飛び出す」の非用を推測するため、カイ 2 乗検定を行った。結果は表 5 と表 6 の通りである。

表 4 会話データにおける ST1 場面の描写タイプ別度数

	「飛び出す」	代替表現	【描写なし】	合計
CLJ	66 (24.8%)	159 (59.8%)	41 (15.4%)	266 (100.0%)
母語話者	27 (54.0%)	20 (40.0%)	3 (6.0%)	50 (100.0%)

( ) 内は割合

表 5 会話データにおける ST1 場面の対象語（飛び出す）／非対象語別結果

		対象語	非対象語	合計
話者	CLJ	66 (78.3)	200 (187.7)	266 (266.0)
	母語話者	27 (14.7)	23 (35.3)	50 (50.0)
合計		93 (93.0)	223 (223.0)	316 (316.0)

( ) 内は期待度数

表 6 カイ 2 乗検定による残差分析の結果  
(会話データにおける ST1 場面)

	対象語	非対象語
CLJ	-4.2**	4.2**
母語話者	4.2**	-4.2**

\*\* $p < .01$

カイ 2 乗検定を行った結果、ST1 場面における対象語の使用は、母語話者と CLJ で有意な差があることがわかった ( $\chi^2(1)=17.27, p < .01, V=.234$ )。そこで、残差分析を行ったところ、母集団においても母語話者は対象語を使用する者が多く、CLJ は非対象語を使用する者が多いことが明らかになった。また、効果量  $V$  は 0.234 となり、中の関連性と言える。したがって、ST1 場面において、CLJ 全体に「飛び出す」の非用が起きる傾向があると思われる。

さらに、非用の有無を目的変数とし、総合習熟度、出身地、学習環境を説明変数としたロジスティック回帰分析を行った。Hosmer と Lemeshow 検定より、モデルのデータへの適合度は良好であると言える ( $\chi^2(8)=5.872, p=0.662$ )。

次に、表7の通り、総合習熟度への $p$ 値が $p<.01$ で、オッズ比が1を下回る(0.504)ため、習熟度が上がるほど非用が少なくなることがわかった。また、出身地への $p$ 値が $p<.05$ で、オッズ比が1を上回る(1.987)ため、台湾CLJの非用率は中国大陸CLJより高くなる傾向があると考えられる。学習環境(日本国内/海外)については $p$ 値が大きい( $p=0.504$ )ので、学習環境が「飛び出す」の非用に与える影響は見られなかった。

表7 会話データにおけるCLJの「飛び出す」の非用への総合習熟度の影響に関するロジスティック回帰分析(ST1場面)

	回帰係数	$p$	オッズ比	95% 信頼区間下限	95% 信頼区間上限
総合習熟度	-0.685	0.000	0.504	0.344	0.739
出身地	0.686	0.039	1.987	1.034	3.816
学習環境	0.286	0.504	1.331	0.575	3.079
定数	2.971	0.000	19.502		

#### 4.1.2 ST1 場面における母語話者及びCLJの使用表現の比較

表8と表9にST1場面の母語話者とCLJの述部の使用表現を示す。CLJの使用表現のうち太字で示したものは母語話者も使用していた表現である。

表8 会話データにおけるST1場面の母語話者の使用表現の内訳(N=50)

使用表現	使用人数	割合
飛び出す	27	54.0%
出る	20	40.0%
<b>【描写なし】</b>	3	6.0%

表9 会話データにおけるST1場面のCLJの使用表現の内訳(N=266)

使用表現	使用人数	割合	使用表現	使用人数	割合	使用表現	使用人数	割合
<b>飛び出す</b>	66	24.8%	走り出す	2	0.8%	ジャンプ	1	0.4%
<b>出る</b>	57	21.4%	いる	2	0.8%	現れる	1	0.4%
飛ぶ	56	21.1%	飛び込む	2	0.8%	出現	1	0.4%
<b>【描写なし】</b>	41	15.4%	嬉しい	1	0.4%	飛び上がる	1	0.4%
出す	9	3.4%	ある	1	0.4%	出掛ける	1	0.4%
逃げる	9	3.4%	飛び出る	1	0.4%	逃亡	1	0.4%
走る	7	2.6%	飛び越える	1	0.4%			
来る	4	1.5%	跳ねる	1	0.4%			

まず、ST1場面における両者の使用表現を概観する。

母語話者に関しては、全体として使用状況が集中している。**【描写なし】**の3人を除く母語話者が「飛び出す」か「出る」の2つの動詞いずれかのみを使用している。その中で「飛び出す」の割合は54%であり、「出る」は40%である。CLJに関しては、**【描写なし】**を除き、21種の使用表現が見られた。よって、母語話者に比べ、CLJはST1場面でのバリエーションが非常に

あると言える。その中で「飛び出す」の使用率は 24.8% で、母語話者の約半分である。

次に、ST1 場面において、母語話者には使用されず、CLJ に多く使用された上位 3 語である「飛ぶ」、「出す」、「逃げる」を分析する。

### 1) 「飛ぶ」

「飛ぶ」の使用率は 3 位であった。「飛び出す」を上手く使用できず、代わりに「飛ぶ」を使用している CLJ が存在する可能性が高いと言える。つまり、この動作のイメージには気づいているが、より適当な複合動詞を使うことができない CLJ が存在すると考えられる。

- (1) あー、でもー、その（連体詞）時、あー犬は、犬はーテーブルに、飛びました  
(CCM39-ST1-00100-K)

### 2) 「出す」

「出す」の使用率は 3.4% で、相対的に低いと言える。使用例を見ると、「出す」が現れた例のほとんどは「飛び出す」や「出る」を使えず、その結果、誤用になっている。

- (2) 犬は、〈んー〉その（連体詞）バスケットー、なの中に〈うん〉、入り（はいり）、出しました。  
(CCH33-ST1-00090-K)

### 3) 「逃げる」

「逃げる」の使用率は「出す」と同率で 3.4% であった。

- (3) で一、そして、その（連体詞）時あの（連体詞）犬が、急に、ん、バスケットから、ん、逃げました  
(CCT56-ST1-00090-K)

さらに、対象語「飛び出す」以外の複合動詞がある程度 CLJ に使用されていることは、ST1 場面の 1 つの特徴として見られる。

表 10 会話データにおける ST1 場面の非対象複合動詞の使用の内訳 (CLJ, N=266 名)

使用表現	使用人数	割合 (全体)	使用表現	使用人数	割合 (全体)
走り出す	2	0.8%	飛び越える	1	0.4%
飛び込む	2	0.8%	飛び上がる	1	0.4%
飛び出る <sup>5</sup>	1	0.4%	出掛ける	1	0.4%

表 10 に示されたように、「飛び出す」以外の複合動詞がある程度使われており、特に前項が「飛び」のものが多く見られる。(4) の例を見ると、一部の CLJ は既習の複合動詞を上手く理解できておらず、正確に使用できなかったものと考えられる。

<sup>5</sup> 本箇所は「飛び出す」の誤用である可能性があるが、実際に存在する表現であるため、個別に取り上げた。

- (4) あーん、あー、バスケター、あけ、開ける時、犬は一、バスケッ、の中から、あー飛び込んで、あ、飛び込んでいました (CCH15-ST1-00090-K)

また、(5) の例を見ると、一部の CLJ は「飛び出す」をすでに勉強し、使用する意識は持っているものの、正しい産出まではできなかった可能性があると考えられる。

- (5) えと、二人は手をつな、つなが、つなげて、ピクニックをし、している時に、犬は、そ、犬は突然、突然にバスケッから、あー、飛びまし、飛びました飛び出ました (CCH17-ST1-00060-K)

## 4.2 SW1 場面

### 4.2.1 SW1 場面における「飛び出す」の非用

SW1 場面における描写の内訳は表 11 のとおりであるが、述部が省略されている場合はそれらの表現が対象語であるかどうかを確認できないため、【省略】とされたデータは標本から除外した。そして、SW1 場面における CLJ の「飛び出す」の非用を推測するため、カイ 2 乗検定を行った。結果は表 12 と表 13 の通りである。

表 11 作文データにおける SW1 場面の描写タイプ別度数

	「飛び出す」	代替表現	【描写なし】	【省略】	合計
CLJ	98 (36.8%)	141 (53.0%)	27 (10.2%)	0 (0%)	266 (100%)
母語話者	42 (84.0%)	5 (10.0%)	1 (2.0%)	2 (4.0%)	50 (100%)

( ) 内は割合

表 12 作文データにおける SW1 場面の対象語（飛び出す）／非対象語別結果

		対象語	非対象語	合計
話者	CLJ	98 (118.6)	168 (147.4)	266 (266.0)
	母語話者	42 (21.4)	6 (26.6)	48 (48.0)
合計		140 (140.0)	174 (174.0)	314 (314.0)

( ) 内は期待度数

表 13 カイ 2 乗検定による残差分析の結果  
(作文データにおける SW1 場面)

	対象語	非対象語
CLJ	-6.5**	6.5**
母語話者	6.5**	-6.5**

\*\* $p < .01$

カイ 2 乗検定を行った結果、SW1 場面における対象語の使用は、母語話者と CLJ では有意な違いがあることがわかった ( $\chi^2(1)=42.24, p < .01, V=.367$ )。そこで残差分析を行ったところ、母集団においても母語話者は対象語を使用する者が多く、CLJ は非対象語を使用する者が多いことが明らかになった。また、効果量  $V$  も大きく、母語話者と CLJ では使用率に大きな差があると

える。したがって、SW1 場面においては、CLJ 全体に「飛び出す」の非用が起きる傾向が高いと思われる。

さらに、非用の有無を目的変数とし、総合習熟度、出身地、学習環境を説明変数としたロジスティック回帰分析を行った。Hosmer と Lemeshow 検定より、モデルのデータへの適合度は良好であると言える ( $\chi^2(8)=6.324, p=0.611$ )。

次に、表 14 の通り、総合習熟度への  $p$  値が  $p<.01$  で、オッズ比が 1 を下回る (0.357) ため、習熟度が上がるほど非用が少なくなることがわかった。また、出身地への  $p$  値が  $p<0.05$  で、オッズ比が 1 を上回る (2.706) ため、台湾 CLJ の非用率は中国大陸 CLJ より高くなる傾向があると考えられる。学習環境 (日本国内/海外) が「飛び出す」の非用に与える影響は確認できなかった ( $p=0.078$ )。しかし、オッズ比は 2.044 であり、効果量としては中程度以上の影響を示唆しており、サンプルサイズの拡大によって有意差が明確になる可能性もある。

表 14 作文データにおける CLJ の「飛び出す」の非用への総合習熟度の影響に関するロジスティック回帰分析 (SW1 場面)

	回帰係数	$p$	オッズ比	95% 信頼区間下限	95% 信頼区間上限
総合習熟度	-1.031	0.000	0.357	0.241	0.528
出身地	0.996	0.002	2.706	1.437	5.097
学習環境	0.715	0.078	2.044	0.924	4.523
定数	3.268	0.000	26.254		

#### 4.2.2 SW1 場面における母語話者及び CLJ の使用表現の比較

表 15 と表 16 に SW1 場面の母語話者と CLJ の述部の使用表現を示す。CLJ の使用表現のうち太字で示したものは母語話者も使用していた表現である。

表 15 作文データにおける SW1 場面の母語話者の使用表現の内訳 (N=50 名)

使用表現	使用人数	割合
飛び出す	42	84.0%
出る	5	10.0%
【省略】	2	4.0%
【描写なし】	1	2.0%

表 16 作文データにおける SW1 場面の CLJ の使用表現の内訳 (N=266 名)

使用表現	使用人数	割合	使用表現	使用人数	割合	使用表現	使用人数	割合
<b>飛び出す</b>	98	36.8%	現れる	2	0.8%	出掛ける	1	0.4%
<b>出る</b>	62	23.3%	いる	2	0.8%	走り出す	1	0.4%
飛ぶ	45	16.9%	出す	2	0.8%	跳ね上がる	1	0.4%
<b>【描写なし】</b>	27	10.1%	飛び上がる	1	0.4%	逃げ出す	1	0.4%
逃げる	13	4.8%	踊る	1	0.4%	飛び込む	1	0.4%
走る	6	2.3%	飛び下りる	1	0.4%	跳び飛ぶ	1	0.4%

まず、SW1 場面における両者の使用表現を概観する。

母語話者に関しては、ST1 場面と同じく、全体として使用状況が集中している。【描写なし】の 1 人と述部を省略した 2 人を除くと、母語話者は「飛び出す」か「出る」かのいずれか 2 つの動詞のみを使用している。その中で「飛び出す」の割合は 84.0% であり、「出る」は 10.0% である。ST1 場面より「飛び出す」の使用率が大幅に上昇している。CLJ に関しては、【描写なし】を除き、17 種の表現の使用が見られた。よって、ST1 場面と同様に、CLJ は SW1 場面でのバリエーションがあると言える。その中で「飛び出す」の使用率は 36.8% であり、母語話者の半分未満である。

また、母語話者では 1 例 (2%) のみが【描写なし】に分類された一方、CLJ の【描写なし】の数は 27 件 (10.1%) である。「食物が食べられた」のように違う内容を述べている場合もあるが、「犬を発見した」のような主人公の視点から述べている例も多く見られる。

次に、SW1 場面において、母語話者には使用されず、CLJ に多く使用された代替表現の上位 3 語である「飛ぶ」、「逃げる」、「走る」を分析する。

### 1) 「飛ぶ」

「飛ぶ」の使用率は 16.9% である。ST1 と同様に、「飛ぶ」は「飛び出す」の代替表現として使われている可能性が高い。

- (6) 二人はお腹がすいたときにバスケット中の食べ物を食べたいけど、突然中に犬ちゃんが飛びました。(CCT29-SW1-00050-K)

### 2) 「逃げる」

「逃げる」の使用は 13 件であり、4.8% を占めている。

- (7) 突然、犬はバスケットから逃げてしまいました。(CCS57-SW1-00050-K)

### 3) 「走る」

「走る」の使用率は 2.3% であり、相対的に低いと言える。(8) を見ると、CLJ による「走る」の用法は「逃げる」に近く、逃走のニュアンスで使用されているものと推測される。

- (8) この時、あのサンドイッチを食べた犬は彼らの側に走りました (CCH56-SW1-00100-K)

また、ST1 場面と同じく、対象語「飛び出す」以外の複合動詞がある程度 CLJ に使用されていることも 1 つの特徴であると見られる。

表 17 作文データにおける SW1 場面の非対象語複合動詞の使用の内訳 (CLJ, N=266 名)

使用表現	使用人数	割合	使用表現	使用人数	割合	使用表現	使用人数	割合
飛び上がる	1	0.4%	走り出す	1	0.4%	飛び込む	1	0.4%
飛び下りる	1	0.4%	跳ね上がる	1	0.4%			
出掛ける	1	0.4%	逃げ出す	1	0.4%			

表 17 に示したように、「飛び出す」以外の複合動詞もある程度使われているが、前件が「飛び」のものに限らず多種の複合動詞が使用されている。また、同じ被調査者と同じタスクであるにもかかわらず、ST1 場面と SW1 場面で使われた複合動詞の内訳は異なっている。その原因は、まず、一部の CLJ は既習の複合動詞を上手く理解できておらず、正確に使用できなかったためと考えられる。また、一部の CLJ は「飛び出す」をすでに勉強し、使用する意識を持っているが、運用能力に不足が見られ、会話場面において正しく産出できていなかった可能性がある。

## 5. 「呼び止める」の非用の実態

### 5.1 ST2 場面

#### 5.1.1 ST2 場面における「呼び止める」の非用

CLJ による「呼び止める」の使用人数が 1 であるため、統計による分析はせずに考察する。

ST2 場面における「呼び止める」の使用状況を見ると、ST2 場面における「呼び止める」の非用が存在すると推測できる。そして、以下の要因からその非用は総合習熟度、学習環境、出身地とは関係なく、CLJ 全員に存在していると思われる。要因としてはまず、筆者が観察した限りでは、CLJ が使用している一般的な初中級教科書（例：『みんなの日本語』、『新版中日交流標準日本語』など）には「呼び止める」という語彙が収録されておらず、日本語授業においても取り上げられる機会が少ないように見受けられる。つまり、ほとんど全ての CLJ が「呼び止める」を習っていないということが主な原因であると思われる。もう 1 つの要因は、その場面で母語話者も使用する代替表現が多く存在することである。さらに、このタスクでは ST2 場面を描写しなくとも、物語をある程度説明することが可能であることも一因であると考えられる。

#### 5.1.2 ST2 場面における母語話者及び CLJ の使用表現の比較

表 18 と表 19 に ST2 場面の母語話者と CLJ の述部の使用表現を示す。CLJ の使用表現のうち太字で示したものは母語話者も使用していた表現である。

表 18 会話データにおける ST2 場面の母語話者の使用表現の内訳 (N=50)

使用表現	使用人数	割合	使用表現	使用人数	割合	使用表現	使用人数	割合
【描写なし】	10	20.0%	咎める	2	4.0%	話す	1	2.0%
呼び止める	10	20.0%	【直接発話】 <sup>6</sup>	2	4.0%	掛ける	1	2.0%
注意	9	18.0%	尋ねる	2	4.0%	問う	1	2.0%
職務質問	6	12.0%	見咎める	1	2.0%	聞く	1	2.0%
言う	3	6.0%	止める (とめる)	1	2.0%			

<sup>6</sup> 伝達動詞がなく直接引用、つまり発話内容のみ描写する使用例は【直接発話】として集計した。

表 19 会話データにおける ST2 場面の CLJ の使用表現の内訳 (N=266)

使用表現	使用人数	割合	使用表現	使用人数	割合	使用表現	使用人数	割合
<b>【描写なし】</b>	131	49.2%	禁止	2	0.8%	相談	1	0.4%
叱る	23	8.6%	<b>掛ける</b>	2	0.8%	<b>呼び止める</b>	1	0.4%
聞く	21	7.9%	怒る	2	0.8%	話す	1	0.4%
言う	17	6.4%	警告	2	0.8%	手伝う	1	0.4%
呼ぶ	15	5.6%	扱う	1	0.4%	叫ぶ	1	0.4%
注意	10	3.8%	止まる	1	0.4%	説教	1	0.4%
<b>【直接発話】</b>	8	3.0%	止める (やめる)	1	0.4%	制止	1	0.4%
<b>止める (とめる)</b>	5	1.9%	<b>尋ねる</b>	1	0.4%	出す	1	0.4%
捕まる	4	1.5%	呼び掛ける	1	0.4%	ストップ	1	0.4%
逮捕	4	1.5%	指摘	1	0.4%	問い掛ける	1	0.4%
質問	2	0.8%	留める	1	0.4%	連れる	1	0.4%

まず、ST2 場面における両者の使用表現を概観する。

ST1 場面・SW1 場面の使用状況と違い、まず、母語話者の使用表現は主に【描写なし】、「呼び止める」、「注意」、「職務質問」の4つに集中している。そのうち、最も多く使用されているのは【描写なし】と対象語の「呼び止める」である。それぞれの使用者数は10人であり、20.0%を占めている。その4つ以外にも10種類の表現が存在する。よって、母語話者のST2場面の描写にはバリエーションがある。

また、CLJの使用表現は合計で33種類あり、そのうち、【描写なし】となったCLJは131人で、全体の49.2%、すなわちほぼ半数を占めている。また、「叱る」、「聞く」、「言う」、「呼ぶ」、「注意」と【直接発話】がある程度使用されているが、それ以外の表現を使ったCLJはわずかである。そして、対象語の「呼び止める」の使用例はたった1例である。したがって、I-JASのサンプルから推測すると、ほぼ全てのCLJが「呼び止める」を使用することができず、ST2場面において「呼び止める」の非用とその代替表現の使用が存在すると考えられる。

次に、ST2場面における「呼び止める」の非用の実態を解明するため、母語話者には使用されず、CLJに多く使用された代替表現の上位語から「叱る」、「呼ぶ」、「捕まる」を分析する。

#### 1) 「叱る」

【描写なし】を除くと、「叱る」が最も多く使用された表現で、その使用率は8.6%である。この点から、(9)のようなCLJは警官の表情などに着目し「怒っている警官」と認識している可能性が窺える。

- (9) えー、それで、ケンは一梯子で、中に入る、として、しようとした(入ろうとした)時、警官が、ケン、警官が、来てー、ケン、ケンを叱りました (CCT26-ST2-00050-K)

#### 2) 「呼ぶ」

「呼ぶ」の使用率は5.6%であり、相対的に低いと言える。主に(10)のようなものである。

- (10) その(連体詞)時、ちゃんと、け、あー警官が、えー通しますぐ、通しましたが、えーけいけん(警官)さんに、呼ばれた (CCH39-ST2-00050-K)

### 3) 「捕まる」

「捕まる」を使った者はわずか4件であり、(11)のようにその焦点は警官が男性を逮捕あるいは逮捕しようとする行為に当たっている。

- (11) えっと、梯子を使って、二階へ、上ろうとしていましたが、その(連体詞)様子は、警察に、警官に、不審人物だと思われて、えー、捕まれ(捕まり)そうに、なりました (CCS24-ST2-00050-K)

さらに、ST1場面及びSW1場面と違って、漢語動詞がある程度CLJに使用されているということは、ST2場面の1つの特徴として見ることができる。これは、既習の表現では描写が困難な場面に直面した際、CLJが自らの母語と一致あるいは類似した表現を援用しようとする傾向によるものと考えられる。このことから、一部のCLJは当該場面を描写する際、たとえその表現が中国語の同場面では一般的に用いられない、あるいは不自然である場合であっても、自らの母語における語用習慣に近い表現(「注意」, 「質問」など)を優先して使用する傾向があることがわかる。王(2000)の指摘を踏まえると、複合動詞の非用は母語の干渉による影響を受けている可能性があると考えられる。

表20 会話データにおけるST2場面の漢語動詞の使用の内訳 (CLJ, N=266名)

使用表現	使用人数	割合	使用表現	使用人数	割合	使用表現	使用人数	割合
注意	10	3.8%	禁止	2	0.8%	相談	1	0.4%
逮捕	4	1.5%	警告	2	0.8%	説教	1	0.4%
質問	2	0.8%	指摘	1	0.4%	制止	1	0.4%

使用例(12), (13)から見て、ほとんどの場合において漢語動詞は「叱る」と「呼び止める」などの代替表現として使われているようである。CLJが用いた漢語動詞の代替表現の中には、「注意」のように母語話者にも使用が確認されたものが1つ含まれているが、それ以外の「警告」や「禁止」などは母語話者には見られず、CLJ特有の代替表現とみなすことができる。これは、CLJは既習の表現でその場面を描写することができず、その代わりに母語の強みを活かし、漢語動詞を用いて描写を完成させる戦略を取っているものと推測される。

- (12) そして、彼は、ははしこー(梯子)をーはこび、はこ、びできて(運んできて)、警官ーが、あ、警官が見て、警告しました (CCM33-ST2-00050-K)
- (13) あーでもその(連体詞)時、けい、けいさ、警官がーんー、か、れを警官が彼を見つけて、んー、そして、あーえーと、警官ー、が制止えー彼、を、制止します (CCH18-ST2-00080-K)

## 5.2 SW2 場面

### 5.2.1 SW2 場面における「呼び止める」の非用

CLJ による「呼び止める」の使用頻度が 0 であるため、ST2 場面と同様に、統計分析は行わない。

ST2 場面と同じように、SW2 場面における「呼び止める」の非用が存在すると推測できるが、母語話者による「呼び止める」の使用率は ST2 場面より上昇しているため、CLJ の「呼び止める」の非用はより高い程度で存在する可能性があると思われる。また、総合習熟度、学習環境、出身地とは関係なく、非用は CLJ 全員に存在していると考えられる。その原因は ST2 場面と同様であると判断される。つまり、「呼び止める」が CLJ が使用する初中級教科書（例：『みんなの日本語』、『新版中日交流標準日本語』など）には掲載されておらず、授業で扱われる機会も少ないため、ほとんどすべての CLJ が学習していないことが主な原因と考えられる。さらに、母語話者も使用する代替表現が多く存在することや、このタスクでは SW2 場面を詳述しなくとも物語のある程度説明できることも、非用の一因と推測される。

### 5.2.2 SW2 場面における母語話者及び CLJ の使用表現の比較

表 21 と表 22 に SW2 場面の母語話者と CLJ の述部の使用表現を示す。CLJ の使用表現のうち太字で示したものは母語話者も使用していた表現である。

表 21 作文データにおける SW2 場面の母語話者の使用表現の内訳 (N=50)

使用表現	使用人数	割合	使用表現	使用人数	割合	使用表現	使用人数	割合
<b>【描写なし】</b>	13	26.0%	<b>【直接発話】</b>	4	8.0%	怒る	1	2.0%
呼び止める	13	26.0%	掛ける	3	6.0%	咎める	1	2.0%
注意	6	12.0%	見咎める	2	4.0%	尋問	1	2.0%
職務質問	5	10.0%	尋ねる	1	2.0%			

表 22 作文データにおける SW2 場面の CLJ の使用表現の内訳 (N=266)

使用表現	使用人数	割合	使用表現	使用人数	割合	使用表現	使用人数	割合
<b>【描写なし】</b>	117	44.0%	<b>掛ける</b>	4	1.5%	<b>尋ねる</b>	1	0.4%
聞く	24	9.0%	扱う	4	1.5%	問う	1	0.4%
叱る	17	6.4%	話す	4	1.5%	助ける	1	0.4%
止める（とめる）	13	4.9%	警告	4	1.5%	止まる	1	0.4%
言う	13	4.9%	連れる	3	1.1%	止める（やめる）	1	0.4%
<b>注意</b>	10	3.8%	指摘	2	0.8%	禁止	1	0.4%
呼ぶ	9	3.4%	叫ぶ	2	0.8%	怒鳴る	1	0.4%
質問	7	2.6%	話し掛ける	2	0.8%	調査	1	0.4%
逮捕	6	2.3%	<b>怒る</b>	2	0.8%	責める	1	0.4%
捕まる	6	2.3%	<b>尋問</b>	1	0.4%	命令	1	0.4%
<b>【直接発話】</b>	5	1.9%	下りる	1	0.4%			

まず、SW2 場面における両者の使用表現を概観する。

母語話者の使用表現の上位 4 つは ST2 場面と同じく **【描写なし】**、「呼び止める」、「注意」、「職

務質問」である。そのうち、最も多く使用されているのは【描写なし】と対象語の「呼び止める」であり、それぞれ 26.0% を占めている。その 4 つ以外にも 7 種類の表現が存在する。

次に、CLJ の使用表現は合計で 32 種類あり、そのうち、【描写なし】となった CLJ は 117 人で、全体の 44.0% に達するが、ST2 場面よりは少ない。また、「聞く」、「叱る」、「止める（とめる）」、「言う」、「注意」、「呼ぶ」がある程度使用されているが、それ以外の表現を使った CLJ はわずかである。そして、対象語の「呼び止める」の使用例は見られなかった。したがって、I-JAS のサンプルから推測すると、全ての CLJ が「呼び止める」を使用することができず、SW2 場面においては「呼び止める」の非用が存在すると考えられる。

次に、SW2 場面における「呼び止める」の非用の実態を解明するため、母語話者に使用されず、CLJ に最も多く使用された代替表現の上位 3 語の「聞く」、「叱る」、「止める（とめる）」を分析する。

#### 1) 「聞く」

「聞く」は SW2 場面で CLJ に最も多く使用された代替表現であり、9.0% を占めている。(14) のような使い方はよく見られるが、ST2 場面での「聞く」の使用実態と違い、(15) のような発話内容の直接引用に使用されたものが大幅に増えている。

(14) 色々な問題をきいている。 (JJC14-SW2-00060-K)

(15) お前、何をするんだと、聞きました。 (CCM27-SW2-00070-K)

#### 2) 「叱る」

「叱る」の使用率は 6.4% である。これは ST2 場面と同様、一部の CLJ は警官の表情などに着目し、「怒っている警官」として認識している可能性がある。

(16) でも、ある警官はこの事情を見ると、ケンさんは警官に泥棒として叱られた。 (CCM34-SW2-00040-K)

#### 3) 「止める（とめる）」

「止める（とめる）」の使用率は ST2 場面より上昇しており、その焦点は男性の動作が停止することに当たっている。

(17) しかし、それを見た警官さんがケンを止めました。 (CCT46-SW2-00040-K)

さらに、ST2 場面と同じく、漢語動詞がある程度 CLJ に使用されていることは、SW2 場面の 1 つの特徴として見ることができる。

表 23 作文データにおける SW2 場面の漢語動詞の使用の内訳 (CLJ, N=266 名)

使用表現	使用人数	割合	使用表現	使用人数	割合	使用表現	使用人数	割合
注意	10	3.8%	警告	4	1.5%	禁止	1	0.4%
質問	7	2.6%	指摘	2	0.8%	調査	1	0.4%
逮捕	6	2.3%	尋問	1	0.4%	命令	1	0.4%

使用例 (18), (19) から見て, ST2 場面と同じくほとんどの場合において漢語動詞は「叱る」と「呼び止める」などの代替表現として使われているようである。CLJ が用いた漢語動詞の代替表現の中には, 「注意」「尋問」のように母語話者においても使用が確認されたものが含まれているが, それ以外のものは母語話者の産出には見られず, CLJ 特有の代替表現とみなすことができる。さらに, (20) のような「逮捕」の使用例は ST2 場面より多い。

(18) でも, 通りかかった警官に見られて, 警告されました。 (CCT59-SW2-00050-K)

(19) その時, 警官がケンの行動を禁止しました。 (CCM14-SW2-00050-K)

(20) ケンが怪しい人にして, 逮捕しようでした。 (CCS12-SW2-00050-K)

## 6. まとめと今後の課題

本研究では『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS) を用いた調査を用い, ミクロの視点で CLJ による複合動詞の非用を捉える試みを行った。「ピクニック」タスクにおいて犬が飛び出してくるストーリーテリング場面を「ST1 場面」, ストーリーライティング場面を「SW1 場面」と呼び, また, 「鍵」タスクにおいて, 警官に呼び止められる場面を同様に「ST2 場面」, 「SW2 場面」と呼び, 分析を行った。以下, 本文の 3 つの研究課題に答える形で結論をまとめる。

RQ1 「同一場面において, CLJ による対象語複合動詞の非用の実態はどのようなものか」に対する結論として, まず, ST1 場面と SW1 場面において, CLJ による「飛び出す」の使用率が母語話者より明らかに低いことを示した。つまり, 会話でも作文でも, CLJ による「飛び出す」の非用が存在すると考えられる。また, カイ 2 乗検定を行った結果から, CLJ は ST1 場面において全体的に「飛び出す」の非用を起こす傾向があり, SW1 場面においても全体的に「飛び出す」の非用を起こす傾向が高いと判断された。以上の結果は, マリヤナ (2017) が指摘した「学習者は母語話者に比べて複合動詞の使用頻度が低い」とする観点を支持するとともに, 志賀 (2017) が述べる「中国人学習者は母語話者ほど複合動詞を使いこなせず, 学習段階と習得状況が比例する」といった傾向とも一致している。さらに, 特定の複合動詞における非用の実態をより包括的に把握することができた。

一方, ST2 場面と SW2 場面において, 母語話者の「呼び止める」の使用率は会話でも作文でもともに低かったものの, CLJ ではほぼ全員が「呼び止める」を使用していないことを示した。つまり, 会話でも作文でも, CLJ による「呼び止める」の非用が存在すると考えられる。その原因は CLJ が全体的にこの動詞を未習得である可能性が考えられる。

RQ2 「CLJ の習熟度, 学習環境および出身地は対象語複合動詞の非用に影響するか」に対する結論として, ST1 場面と SW1 場面にロジスティック回帰分析を行った結果, 会話でも作文でも,

CLJの総合習熟度が上がるにつれ、「飛び出す」の非用が顕著に低下していることがわかった。これは、志賀(2017)の結論を裏付けるものである。また、会話・作文のいずれにおいても、台湾CLJの「飛び出す」の非用の傾向は、中国大陸CLJよりも明確に強く見られた。さらに、「飛び出す」の非用において、学習環境については有意な差は認められなかった。したがって、学習環境によって「てくれる」の使用に差が見られたとする張(2017)の結論は、本研究では確認されなかった。そこで、今後、JSL学習者の総合習熟度を考慮した上でデータを増やして分析することを考えている。

一方、実証分析のデータ要件を満たさなかったため、ST2場面とSW2場面に対するロジスティック回帰分析は行うことができなかった。しかし、「呼び止める」がCLJのほぼ全員に使われていないため、「呼び止める」の非用は総合習熟度、学習環境、出身地とは関係なく、CLJ全員の間に存在している、すなわちCLJが全体的に未習得な複合動詞と推測された。ここから、CLJによる複合動詞の学習と母語話者による複合動詞の使用の間に齟齬があることが示唆された。

RQ3「CJLが対象語複合動詞を使っていない場合、どのような代替表現を用いているか」に対する結論として、まず、ST1場面とSW1場面において、多くのCLJは、母語話者が使わない単純動詞を代替表現として使用している点を1つの重要な特徴としてとらえることができた。これは高(2018)の調査結果と一致する点も多いが、CLJによる代替表現の多くは母語話者に用いられないものであるため、それらの表現が意思疎通に十分寄与しているか、とりわけビジネスなどの高レベルの使用場面において適切であるかどうかについては、今後の検討課題である。また、対象場面の描写自体の回避と、「飛び出す」以外の複合動詞の使用も確認できた。

次に、ST2場面とSW2場面において、「飛び出す」の状況と同じく、非用を起こしている多くのCLJが母語話者の使わない単純動詞を代替表現として使用していることがわかった。また、CLJによる【描写なし】の割合が高いことと、漢語動詞がある程度CLJに使われていることも見られた。

以上の分析の結果、会話でも作文でも、特定の場面においてCLJは全体として適当な複合動詞の使用頻度が母語話者より少なく、代替表現として単純動詞を使う傾向があるという非用の実態を捉えることができた。また、複合動詞の非用は総合習熟度と出身地に影響されていることが1つの場面において検証された。このように、非用に着目した研究を進めることは、学習者が習得すべき複合語を客観的にとらえることができるため、複合動詞の習得研究の新たな研究方向を示唆するものになるであろう。今後は、対象場面や、対象の複合動詞を増やして検討したい。また、各学習環境におけるJSLのデータの補強や、新たに自然習得のCLJのデータ追加も検討し、研究を進めていきたい。加えて、他の母語の学習者との比較を通して、CLJに特有の傾向がどうかを明らかにすることも今後の課題である。

## 参考文献

王燕(2000)「授受表現における『非用』について—中国語を母語とする日本語学習者の場合—」『2000年度日本語教育学会秋季大会予稿集』49-54.

- 高娟 (2018) 「作文コーパスにおける中国人学習者の日本語複合動詞の誤用分析」『日本語・日本文化研究』28: 64-71.
- 小林典子 (2005) 「言語テスト SPOT について—用紙形式から WEB 形式へ—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』20: 67-82.
- 小林典子・フォード順子・山元啓史 (1996) 「日本語能力の新しい測定法『SPOT』」『世界の日本語教育』6: 201-218.
- 迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬 (2020) 『日本語学習者コーパス I-JAS 入門—研究・教育にどう使うか—』東京: くろしお出版.
- 迫田久美子・小西門・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子 (2016) 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」『国語研プロジェクトレビュー』6(3): 93-110.
- 志賀里美 (2017) 「『YNU 書き言葉コーパス』から見た複合動詞の使用実態—日本語母語話者と中国人学習者との比較—」『恵泉女学園大学紀要』29: 69-91.
- 張卉娟 (2017) 「学習環境が『てくれる』の『非用』に与える影響について—中国語母語話者を対象として—」『日本語研究』37: 1-14.
- 陳曦 (2008) 『第二言語としての日本語複合動詞の習得—コーパスによる使用実態の調査を中心に—』北京: 中国社会科学出版社.
- 陳迪 (2023) 「中国語を母語とする日本語学習者の発話における高頻度漢語動名詞の使用実態—『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』を用いた調査—」『統計数理研究所共同研究リポート』465: 1-22.
- 丁若峰 (2024a) 「『非用』の定義と再定義—中国人学習者による複合動詞の使用実態に基づいて—」『中国語話者のための日本語教育研究会第 56 回研究会』144-145.
- 丁若峰 (2024b) 「使用実態から見た複合動詞の『非用』—『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』に基づく分析—」『言語資源ワークショップ 2024 発表論文集』1: 188-206.
- 姫野昌子 (2018) 『新版 複合動詞の構造と意味用法』東京: 研究社.
- マリヤナ・ヴォイニコヴァ (2017) 「日本語学習者による複合動詞の使用についての実証研究—母語話者・学習者コーパスによる調査をもとに—」『日本語・日本文化研究』27: 89-97.
- 水谷信子 (1984) 「誤用分析 (1) @だれかがわたしの財布をとりました」『日本語学』3(4): 122-124.
- 水谷信子 (1985) 『日英比較話しことばの文法』東京: くろしお出版.
- 水谷信子 (1993) 「連載 語用論の現在と将来 (5) —「非用」と談話の展開—」『日本語学』12(10): 88-96.
- 水本篤・竹内理 (2008) 「研究論文における効果量の報告のために: 基本的概念と注意点」『関西英語教育学会紀要 英語教育研究』31: 57-66.
- 森田良行 (1994) 「動詞の複合における意味構成」『動詞の意味論的文法研究』東京: 明治書院.
- Hair, Joseph F., William C. Black, Barry J. Babin, Rolph E. Anderson & Ronald L. Tatham (2006) *Multivariate data analysis*. New Jersey: Prentice Hall.
- Hulstijn, Jan H. & Esther Marchena (1989) Avoidance: Grammatical or semantic causes? *Studies in Second Language Acquisition* 11(3): 241-255.

## 関連 Web サイト

- 国立国語研究所 『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』 (I-JAS) <https://www2.ninjal.ac.jp/jll/lsaj/ihome2.html> (2025 年 8 月 17 日確認)
- 日本語テストシステム J-CAT [https://j-cat.jalesa.org/?page\\_id=168](https://j-cat.jalesa.org/?page_id=168) (2025 年 8 月 17 日確認)
- 筑波日本語テスト集 TTBJ <https://ttbj.cegloc.tsukuba.ac.jp/index.html> (2025 年 8 月 17 日確認)

## **Avoidance of Compound Verbs in Japanese: Based on Analysis of the ‘International Corpus of Japanese as a Second Language’**

DING Ruofeng

Graduate Student, The Graduate University for Advanced Studies,  
SOKENDAI / Project Collaborator, NINJAL

### **Abstract**

Despite the importance of high-frequency compound verbs (V1 stem + V2) in Japanese, they remain challenging for L2 learners of Japanese. This paper focuses on the phenomenon of avoidance, a rarely addressed aspect of compound verb acquisition. Analysis of the use of two compound verbs in two specific situations from the “International Corpus of Japanese as a Second Language” revealed that Chinese learners of Japanese tend to use compound verbs less frequently than native Japanese speakers both in conversations and compositions, often opting to use simple verbs as alternative expressions.

**Keywords:** compound verb, usage situation, avoidance, Chinese learners, Japanese language education